

「SMON」

高 崎 浩 三重県立大学学長
金 丸 正 泰 三重大学 助教授

著

岡山大学助教授・内科
島 田 宜 浩

SMON という疾患がわが国の医学界で有名になりはじめたのは、昭和42年ころからであろう。ちょうどそのころ岡山県においても県南にある井原市と県北の湯原町に SMON 患者が多発しはじめていた。筆者が SMON 患者を診察したのは、さらに遅れた43年の終りころ、井原市の流行時の患者が最初であった。その際に受けた強烈な印象のとりことなり、以来現在までほぼ6年の長い期間 SMON の研究を続けている。

SMON 研究のパイオニアには楠井教授、清野博士とともに本書の著者である高崎教授の名が有名である。高崎教授の研究は昭和35年12月に日本内科学会東海地方会で発表した「腸疾患経過中に発生した下半身麻痺の症例について」と題した発表が最初であり、その後多くの研究のち昭和42年12月には本書の第1版である「腹部症状を伴う脳脊髄炎症」が出版されている。この著書は SMON に対する、まとまった単行本が他にないことと、その正確で推測を交えない記載が多くの人々の愛読書たらしめ、SMON の専門的研究者から一般臨床家にいたるまで、広く座右の書として愛用されたものである。

その後、SMON の研究には、ウイルス感染説、キノホルム説が次々に発表され、数多くの成果と矛盾に対する論議をはらみながら現在にいたっている。本書はその間の過程をきわめて正確に記載している。歴史的に SMON 研究の経過を知るうえに、単行本として、本書ほど正確にまとめられたものは他になかろう。

本書は、大別して、I. スモンとは、II. 病理、III. 病因、IV. 疫学、V. 症候、VI. 診断ならびに鑑別診断、VII. 経過ならびに予後、VIII. 治療、からなっている。I. スモンとは——には本症の概念と歴史が記載され、II. 病理——にはスモン調査研究会に属する病理学者より提供された19コの附図が掲載され、中枢神経系・末梢神経・視神経・自律神経の障害が組織標本により示されている。

III. の病因論は読者がもっとも注目するところでもあるが、まず、④「感染症の立場」の項目にはウイルス感染を中心にして、歴史的な事項を述べたあとで、京大ウイルス研井上助教授が発見した新種ウイルス、(のちに SMON Herpesvirus として J. L. Melnick & E. A. Adelberg 著 Review of Medical Microbiology (11th Edition) 445頁、1974年に記載されたもの)が多数のスモン患者の糞便とリコールから分離されること、患者血清に中和抗体の上昇があること(中和抗体価の上昇については、その後 Lancet 2: 705, 1972. に詳しく報告される)、C₅₆BL 型新生マウスの脳内接種で脊髄に炎症を欠く変性所見が Goll 索と錐体路に認められることなどの成績とこれに対する追試の状態が詳細に記載されている。

⑤「中毒、代謝障害の立場」からはビタミン欠乏症、農薬・工業薬品・重金属中毒とスモンの関係を述べた後にキノホルムなる項目をつくりスモン患者にしばしば認められる緑舌がキノホルムによるものであることに端を発したキノホルム中毒説に対するスモン調査研究会員の研究成績がカラーズライドを含めた12の附図を用いて詳細に記載されている。IV. 疫学——の項では全国のスモンの発生状況が7コの附図と3コの表に示されている。なかでもキノホルム剤発売中止措置の前後におけるスモン患者発生状況の変化が詳細に記載されているが、そのうちでも昭和44年度にスモン発生の減少の傾向を示す県が6県あったことは注目に値する事とされている。さらにVの症候、診断、経過、予後、治療についてはスモン調査研究会の成績を中心に詳細に記述がなされている。

以上のように、本書には昭和40年ころの前川班の時代以来の SMON 研究の経過が項目毎に整理され、それぞれの項目について客観的な記述方法により詳細に記載されている。これらの諸点は他の報告に類例がなく、その価値は高いものと考えられ、今後予想される本症の研究成果に寄与するところが大きいものと考えられ、心から本書を推薦したい。B5・頁162・図14・写真76・原色図5

¥ 4,000 円140
医学書院刊

胃と腸 1975年4月

2026/09/20 03:08:34